

6.

DOMON Ran
YANASHITA Kyohei

土門 蘭×柳下 恭平

書くことでとり着く、
想像の外へ

鶴 島

二〇二〇年一月八日 京都「西尾八ッ橋の里」



真つ赤な本の佇まいに目を奪われた。

靴のサイズを測るように、右手を表紙の上にあててみる。やや細身の判型は、日本と韓国の女性の平均的な手のサイズに合わせたという。わたしの掌は、四方にわずかな余白を残せるうちにびたりと収まった。本のタイトル『戦争と五人の女』がハングルと日本語で箔押しされていて、ペンを握る女の手の影が、うつすらと映り込んでいる。

戦争をえがく若い作家に会いたいと思っていた矢先に、わたしは刊行されて間もないこの美しい本と出合った。

一二月八日。

京都四条烏丸の本屋で『戦争と五人の女』刊行記念トークイベントが開かれた。七八年前のこの日、日本軍がハワイ真珠湾の米軍基地を攻撃し、太平洋戦争が始まった。

物語は、太平洋戦争の終結から五年後に始まった朝鮮戦争が休戦を迎える、一九五三年七月のひと月の話。広島県呉市朝日町で生きる五人の女を中心に描かれる。著者の土門蘭さんは、呉出身の小説家。作家であると同時に、出版社を営んでもいる。

〈ファンタジーとしての従軍慰安婦〉を書きたいと思った――。

土門さんはトークがはじまると、軽やかにそう言った。

太平洋戦争終結までの一五年間、日本軍は占領した各地域に軍の慰安所を作り、日本本

土、朝鮮、台湾などから慰安婦を動員し、さらに地元の女性も対象となった。

一九九〇年代以降、慰安婦問題が国際社会の中で注目され始めてから、二〇一九年はとくに様々なニュースに関心が集まった。日本では慰安婦をめぐる映画の上映が議論を呼んだ。また慰安婦像を展示した芸術祭の企画展が脅迫や抗議により中止に追い込まれ、閉幕七日前に再開したものの、文化庁が芸術祭自体への補助金不交付を発表し、政治介入がなされた事実を含めて問いを多く残した。

トークは土門さんと一緒に出版社〈文鳥社〉を経営している編集者の柳下恭平さん、装

釘を担当した橋本太郎さんの三人で繰り広げられ、刊行までのストーリーに深く魅せられた。この日、会場では土門さんの短歌と橋本さんの漫画による新刊が発売された。購入すると土門さんが短歌を一首、サインに添えてくれるという。わたしは新刊を手し、サイン会の整理番号が呼ばれるのを待った。

「趣味は何ですか？」と土門さんに質問されて、即答できずにいると「好きな季節は？」と質問を変えてくれた。「春です」と答えると、次の歌が見返しに詠まれていた。

歳をとり 様々な欲 なくしても

エバーグリーンな 歌をうたつて

トークイベントから、ちょうどふた月がめぐった。

東京駅午前八時四〇分発の新幹線車内は満席で、乗客はほぼマスクをしていた。新型コロナウイルスの感染拡大で、一月三日に中国の武漢が封鎖、日本国内でもマスクの品切れが続いていた。これが自由に移動できる最後の取材になるかもしれない。

取材の前に、土門さんが『戦争と五人の女』を執筆した老舗珈琲店を訪れた。

落ち着きと開放感がある店内は、一席ごとの間隔がゆったりと設けられていた。自然光が降り注ぐ中央の吹き抜けには、うつくしい、砂紋の石庭がある。思っていたよりずっと光に溢れているこの場所で、『戦争と五人の女』を執筆している土門さんを想像してみただけで、うまくいかない。でも、これから会って話を聞けるんだと思うと胸が高鳴る。最後にも一度店内を見渡してから、待ち合わせの場所に向かった。取材には、編集者の柳下さんも同席くださった。

ファンタジーとしての従軍慰安婦

土門

私は広島県呉市で生まれました。母は韓国のソウル出身で、父は日本人です。『戦争と五人の女』に登場するジュンヒ（異国の地でからだを売り老いていく、五人の女の中で最年長）は、ほとんど母をモデルに書きました。母は昭和二五（一九五〇）年生まれと

言っていますが、朝鮮戦争が始まる混乱期に生まれたので、生年月日がちよつとあやふやだそうです。母は幼い頃に両親が離婚し母親と別れ、父親が再婚したので継母に育てられました。継母は四人の子どもを産んで大学まで行かせましたが、母は中学を卒業してからも家の手伝いをさせられていたようです。母には結婚を考えた恋人がいましたが、相手の親に学のない女とは結婚させられないと反対されたらしくて。仕事も限られているし、恋人とも結婚できないので、知り合いのつてを頼って三〇歳で呉に来ました。一九八〇年代に韓国やフィリピンから日本に働きに来るブームの先駆けでした。

父は北海道出身で、一人兄弟の九番目。家族は牧場を経営していましたが、父は兄とそりが合わず、生き物も苦手だったので工業系の専門学校に行きました。造船所のある呉で就職し、そこで出会ったふたりの間に生まれたのが私です。

ふたりとも一生懸命働いていましたが、かなり貧乏な家でした。私は小学校入学時に母の日本語能力を超えていたので、煩雑な書類手続きなどは私が代わりにやっていました。もともとは精肉店や喫茶店などで働いていたようですが、母は途中からホステスとして働き始めました。私が小学校に上がる頃、独立してスナックを立ち上げます。

ある日、私が母の店でお客さんにもらったお寿司を食べていると、酔っぱらったお客さんからお箸の持ち方が違うと言われたことがあります。「韓国人の娘だし、礼儀作法もなっていないだろうね」って、母の前で普通に差別的な発言をする。スナックでくだを巻

いて溜飲を下げていたのかもしれませんが、それを母が笑ってなだめてあげる。

ずっとそんなものを見てきたので、日本人でもないし韓国人でもないという気持ちで育つていきました。私は韓国語が喋れないから韓国人ではないと思っっているけれども、母や私のことを差別する日本人を見ていると、どうしても自分が日本人とも思えない。最初はその辛かったんですが、だんだんそれが自分のアイデンティティーなのかもしれないという気持ちになってきました。

二五歳から一〇〇枚の短編小説を三本書いたのですが、全部モチーフは母だったんです。どこにも属せない人とか、国から異端扱いされている人の象徴が母だったので、彼女を書くことで自分と母を理解しようとしていました。

柳下さんとは、三作目を書き終わったタイミングで知り合いました。

実は、もう小説を書くのを辞めようと思っていたんです。自分自身が母親になったことで小説を書かなくても生きていける方法を見つけたと思っていました。そんなときに「一緒に小説を書きませんか」と言われて、自分ひとりでは書けないものを書こうと考えて浮かんだのが〈ファンタジー〉としての〈従軍慰安婦〉でした。

従軍慰安婦は韓国の人が周りにいるとどうしても身近にあるものです。でも、何が事実かわからない私はどちらの味方にもなることができない気持ちがある。象徴的に書こうとすると、母が浮かびます。幼い頃から見てきたスナックの風景と合致するので、それを元

に描けないかなと思いました。

柳下 広島は軍港で、軍人や軍属が多いエリアです。カウンターを挟んで女性と男性がいる。戦争は様々な文学で描かれてきたモチーフですが、抗うことができない大きな暴力のメタファーだと思うんです。理不尽な流れに対して、我々の日常が簡単にひっくり返る。そういう戦争を背景に男女を描く場合、フェミニズムや歴史認識など表現が難しい問題もあるけれど、僕はもつとパーソナルでいいと思っていたので、最初に〈ファンタジー〉としての〈従軍慰安婦〉と聞いたときは興奮しました。

戦争や従軍慰安婦ということばだけを切り取ると大きな歴史に回収されてしまうものが、〈ファンタジー〉としての〈従軍慰安婦〉を書くことで個人的な共感を作ることができる。今起こっている現代的なこととも結び付き、普遍的な気がしたんですね。

土門 その時はただ、ファンタジーが書きたかったんです。年齢は一〇代から五〇代くらい、性格や性的指向もさまざま、どこの国かわからないカタカナの名前の女性が五人いる。戦争で荒れ果てた土地に、たんぼぼみたいに生きている女を書きたいな、と。

〈ファンタジー〉としての〈従軍慰安婦〉と〈焼け野原に咲いたんぼぼ〉——このふたつのことばから書き始めました。